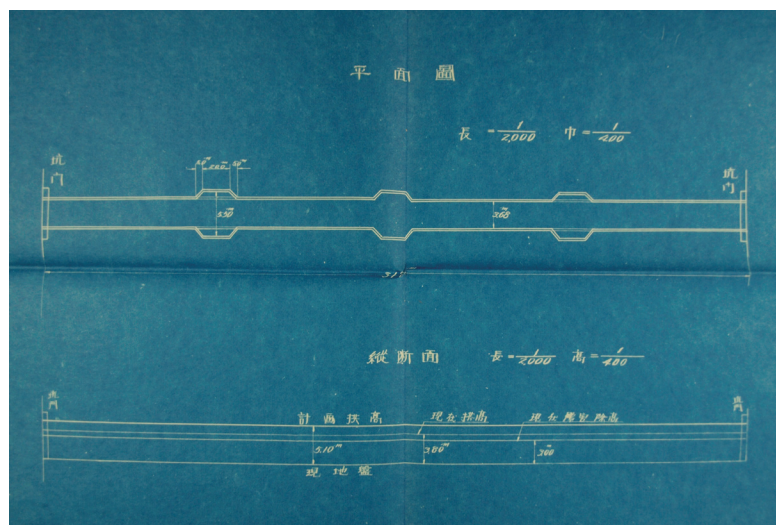
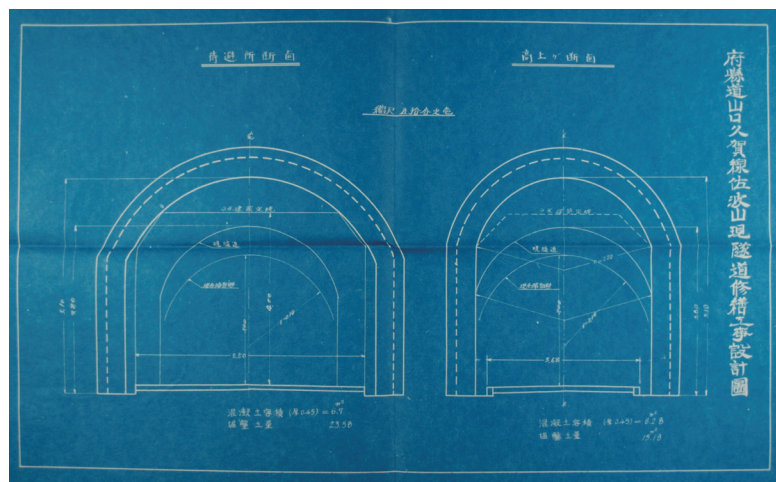


乗合バスの普及



＊戦前戦後土木部20「柳井・室津・平生・虹ヶ浜間省営自動車一件」佐波山トンネルの拡張工事の設計図です。

解説

山口県内の乗合バスは、1918（大正7）年、防長自動車株式会社が萩駅・篠目村間の営業を開始したのが始まりで、その後しだいに増加し、大正末には約100社となり県下全域に及びました。

昭和期に入ると、鉄道省が省営バス路線を計画したことに伴い、県下各地から鉄道大臣あてに予定路線編入の請願が相次いでなされました。

県内最初の省営バス路線は、1931（昭和6）年に開設された三田尻（防府）・山口間の「三山線」でした。これは全国で二番目の省営バス路線で営業成績も順調でした。1933年には萩まで延長され、山陰・山陽を結ぶ自動車連絡幹線となりました。その後、岩国・日原間、山口・於福間、柳井・岩国間、光・室積間なども相次いで開設され、乗合バスは人々にとって日常不可欠の交通機関になっていきました。

路線拡充に伴い、道路の整備も必要となりました。写真は佐波山トンネルの拡張工事の図面です。佐波山トンネルは1887（明治20）年に山口・防府間の勝坂峠に掘られたトンネルでしたが、省営バスの営業に伴い、517mと長く狭いこのトンネルの通行に支障が出てきました。そのためトンネルの高さを高くし、途中で待避所を3箇所設け、離合をしやすくするなどの改修が加えられました。

その後、自家用車の所有が本格化する昭和40年代に佐波山に新トンネルが掘られ、上下4車線となりました。



＊リーフレット昭和48-22
「一般国道262号 佐波山隧道
開通 昭和48年9月18日 佐波
山隧道」